

カメラロール喫茶の起床

鈴木はる香

レモンが植えられた皿の肌をなでる

コーヒーが息を吸って吐き出した、漂う白いベールが風に巻かれて渦になっている

私は黒色を白で操った

目に入ってきたものを網膜でじっくり触って、  
降ってきた羽を逃がさないようにして、

次が浮かばない時は、髪で顔を覆う  
外にいる私を、内側。内側へ。

「世界」

を何と言おうか  
考えている

机の木の実に架かっている橋たちを、削るように指でなぞって問いかけてみる

が、応答はない

この詩の終わりが見えない

ケーキとコーヒーを中途半端に生き残らせてみた

「る」と「た」で迷って「る」。「た」。

カップの体温と溶け合ったコーヒーはすっかり冷たい

「私はノートの罫線幅を気にしたことがない」と書いている今は、気にしている。

電流が届かない矢印はどこへ向かっているのか

カップソーサーの周りを夕焼けで照らしているランプの中で詩をうたいたい。

カウンター越しの店主が置いた砂時計の砂が下に落ちる前に寝そべりたい、くびれ。

ガスコンロのチチチチチ

頭の目に写る、眠たそうな冬の顔

下手な笑顔は湯気の表面にくっきり映るから

そのまま